

石のスープ[°]

飢えたダウン症の修道士が、貧しい集落に辿り着きました。

「どうか食事を頂けないでしょうか」

修道士は、民家を訪ね、食事を求めますが、断られてしまいます。

「嘘をついてしまおうかな」

修道士は、そうつぶやくと、道端に落ちていた石を拾い上げ、別の民家を訪ねます。

「この石を使うと、美味しいスープが出来上がるんです」

「ほう、面白そうですね」

「どうか鍋と水を頂けないでしょうか」

民家の家人は、修道士を招き入れ、石と水を鍋に入れ、煮込みました。

「…ん？ この石は少し古いですね」

「どうなるんですか？」

「スープが薄味になります」

「どうすれば、美味しくなりますか？」

「塩を少々、頂ければ、美味しくなります」

「では、塩を入れましょう」

といった具合に、次々に、食材を鍋に入れるよう話しました。

結局、麺と野菜と肉を入れた、大変美味しい鍋が出来上がりしました。

「これは美味しい！」

鍋を食べた家人は、絶賛しました。

修道士も、久しぶりの食事で、一命を取り留めました。

「この石を頂けませんか？」

「同じように作るには、コツが要りますよ」

「ええ、よく見てましたから大丈夫です」

「では、授けましょう」

結局、道で拾った石を家人に譲り、修道士は、旅を続けます。

こうして、各地で、石を使った料理が有名になり、石が流行りました。

修道士は、ブームの火付け役として、有名人になりました。

しかし、修道士は、表舞台に出てくることはありませんでした。

この修道士、ダウン症ということで、修道院を追い出された身だったのです。

「有名になったら、ダウン症の子たちが差別を受ける」

修道士は、死に場所を探して、旅を続けていたのです。

でも、飢えには勝てず、石で食事を得ていました。

その折、ある修道院が、その噂を聞きつけ、ダウン症の修道士を探し出しました。

「貴方を必要とする場所があります」

「修道院には戻りません」

「ダウン症児の施設の料理番になってください」

「…それならば」

修道士は、道中、涙を流して、お札を言います。

「私を必要としてくれる人がいたとは…」

「貴方にしかできない仕事です」

了

Copyright (C) 2016. Angel RISA. All Rights Reserved.